

清めの舞台としての蘭家庭園

永松義博*, 杉本和宏, 吉田 健

南九州大学 環境園芸学部 環境園芸学科

2016年10月1日受付; 2017年2月1日受理

The Sonoke Garden as A sacred stage

Yoshihiro Nagamatsu*, Kazuhiro Sugimoto, Takeshi Yoshida

*Faculty of Environmental Horticulture, Minami-Kyushu University,
Miyakonojo, Miyazaki 885-0035, Japan/Japan*

Received October 1, 2016; Accepted February 1, 2017

The Sonoke Garden, located in Kasari-cho, Amami City, Kagoshima Prefecture, is believed to have been created during feudal times. It is considered to be the most precious of all Japanese gardens found on Amami Oshima. Surveys, literature reviews, and a study of local traditions revealed that the garden was developed as a “Mya”—a sacred place to worship Amami Oshima’s gods. Its purpose as a place of worship became apparent from the frequent use of the site to host government officials, and the presence of a “Kamimichi” : holy path within the gardens. In contrast to the numerous remaining Mya sites in the Amami region, which are now nothing more than vacant blocks of land, the Sonoke Gardens is surrounded by sacred waters flowing from the Yamagusuku and has therefore been preserved as a holy place.

Key words: The Sonoke Garden, Amami Oshima, Mya, kamimichi.

1. はじめに

鹿児島県奄美市笠利町にある蘭家住宅の敷地には、グスク時代に琉球王国から訪れた役人たちを接待したと伝わる庭園がある。蘭家庭園は、少なくとも藩政期に作庭されたと考えられる奄美大島唯一の庭園である。

庭園は昭和46年に町指定文化財となり、奄美市となった際に市指定文化財として引き継がれたが、歴史的史料は確認されておらず、伝承が残るのみである。奄美大島は琉球文化圏に属しており、沖縄の方言や生活、宗教などに類似する点が多いが、奄美が沖縄文化に影響を与えているものも多い。

また、奄美には大和朝廷の直轄の地であった時代があり、正倉院に大島紬が所蔵されていることや平家落人伝説が残る。このことは、古くから本土との繋がりがあったことを示し、本土の文化から独自の文化に発展してきた。

その後、琉球王国および薩摩藩によって統治されながらも奄美独自の文化を現在に伝えている。本研究では、琉球王国および薩摩藩の影響下で独自に築かれた庭園の特色と奄美における庭園の位置づけを考察した。

2. 研究方法

本研究では、奄美市歴史民俗資料館及び奄美市立奄美博物館での文献調査に加えて、蘭家6代目蘭博明氏への蘭家庭園についての聞き取り調査を行った。さらに、現地での実測調査、周辺の踏査によって、水系や周辺環境、立地条件を調査した。

3. 蘭家庭園の伝承内容

蘭家は琉球王国との繋がりがあり、旧暦の正月2日には8人から12人程の首里城の役人たちが蘭家庭園を訪れていたといわれる。役人たちに料理をふるまう際、

*連絡著者

皿が足りなかったため、やむを得ずサネンの葉に赤飯を盛って出したところ大変喜ばれ、琉球王国に帰ってからも話題になるほどであったと伝わる^{注1)}。

主屋の一段下がった所に広場があり、庶民たちが踊りで役人たちをもてなしたとされる(図1)。建物から庭を望むとセン岳が借景となり、そこから昇る朝日が建物の奥まで届いていたといわれる^{注1)}。

4. 庭園の現況

1) 庭園の構成

蘭家庭園は、隣接する谷川の水を庭園内に引いて池泉としている。池泉(図2)は中央の広場を囲み、5つの池が水路(図3)でつながっている。池泉の護岸は石を並べただけのもので、樹木の根が護岸の土を支えている箇所が多い(図4)。

水による護岸の浸食が進み、池泉は広がりつつあるようであり、造成当初の池泉は現在よりも狭い水路であったと考えられる。水汲み場として使われた池(図5)と排水用の溝が整備され^{注1)}、主に生活用水として利用されていたことがわかる。

踊りが行われていたと伝わる広場(図6)は、主屋



図3. 池泉をつなぐ水路



図4. 護岸を支える根



図1. 蘭家庭園の伝承に基づくイメージ図



図5. 水汲み場



図2. 広場を囲む池泉



図6. 広場

と池の間に位置し、広場には花壇などが造成されていたため、現在はおよそ100平方メートルであるが、当初は約220平方メートル程の広さであったことが蘭家庭園実測図(図7)から推測できる。

明治期に主屋(図8)が建築されるまでは2棟の茅葺屋根の建築物があったと伝わり^{注1)}、昭和18年、25年には移築改修された。建物にはヒキモンと呼ぶ横架材が用いられ、間取りはオモテ(前室)とトゴラ(台所)から成る分棟型の住宅となっている¹⁾(図9)。

蘭家は島役人ではなかったが、このような住居の間取りや建材から身分の高い家系であったことが推察される。蘭家は蘭と名乗り始めた友喜女を先祖としており、友喜女は琉球王の血統家である前島家(大親家)の生まれであった。

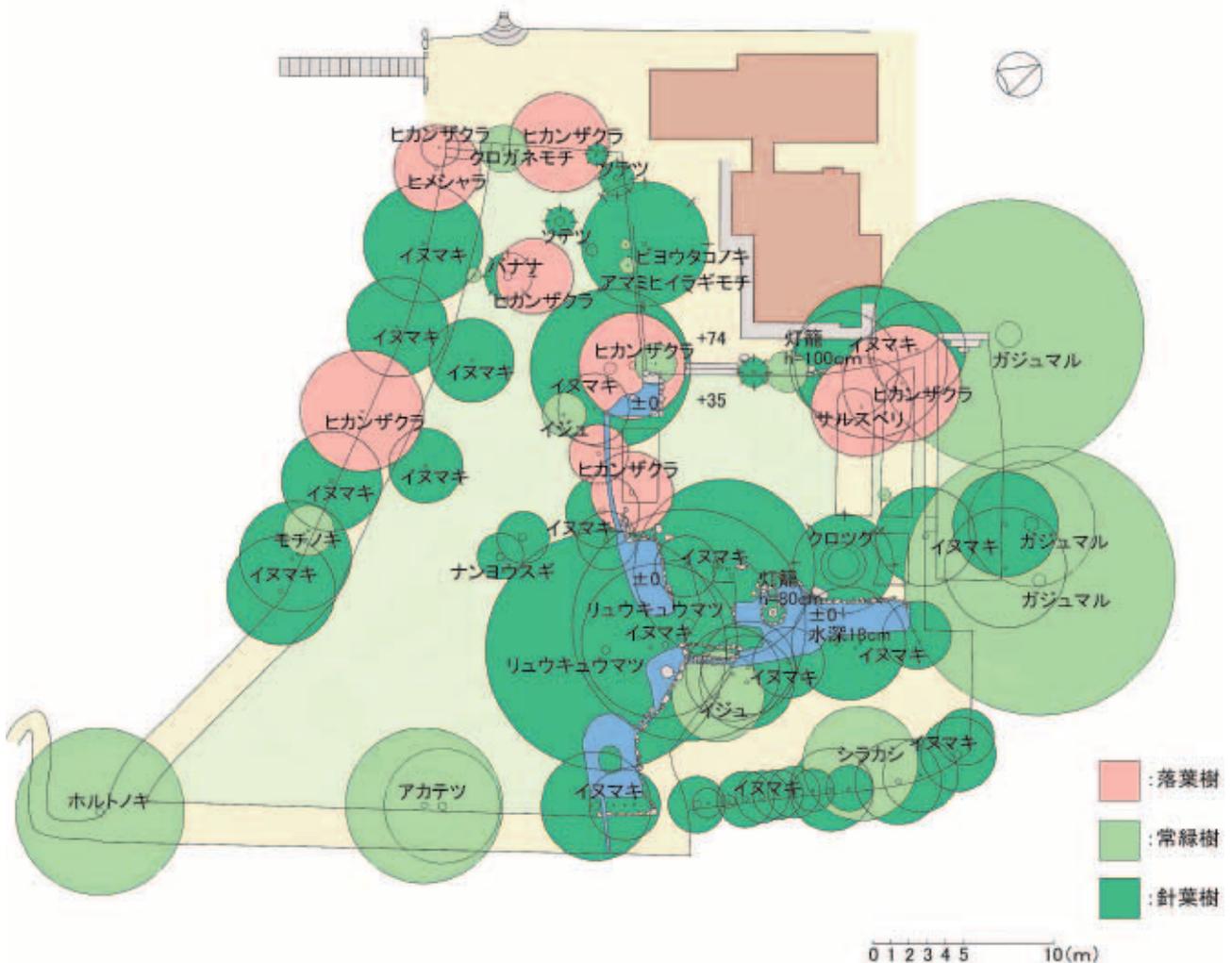
また、奄美では井戸を掘っても石灰が出て、水を手に入れることが容易ではなかったため、水源の所有は権力の象徴であり、庭園に水を引いた蘭家は権力を有していたものと考えられる。琉球王からの血筋、建材、水源の所有から、広大な土地と住居を所有する権力を有した様子が窺える。

当時影響を及ぼしていた琉球王国の奇岩奇石を用いた枯山水庭園や薩摩藩の地形を生かした剛健な庭園と比較すると、蘭家庭園にはそれらのような特徴が見られなかった。そのため、独自に造られた庭園であることが考えられる。

2) 動植物について

友喜女は非常に花を好んでいたことが伝わっており、蘭という苗字も友喜女の花好きに由来するとされる。友喜女は現在の蘭家住宅に移り住んでから、さまざまな植物を集めては庭や裏山に植え、裏山の頂上までヒカンザクラやサンダンカなどが植えられたとされる^{注1)}。現在は、裏山に植えられた樹木は他の雑木に覆われて確認できないが、庭園内にはヒカンザクラとサンダンカが見られる。また、友喜女と2代目の有圓志は共に中国を訪れ、クネンボ(ミカンの木)を日本に初めて持ち帰ったとされており、クネンボを植えた場所はクネグザクと呼ばれている^{注1)}。

園内に存在する複数の大木は庭園の古さを表している。南方系の樹木が多く、リュウキュウマツやガジュ



蘭家庭園 実測者 吉田健 山下真輝 永松義博

図7. 蘭家庭園実測図



図8. 主屋

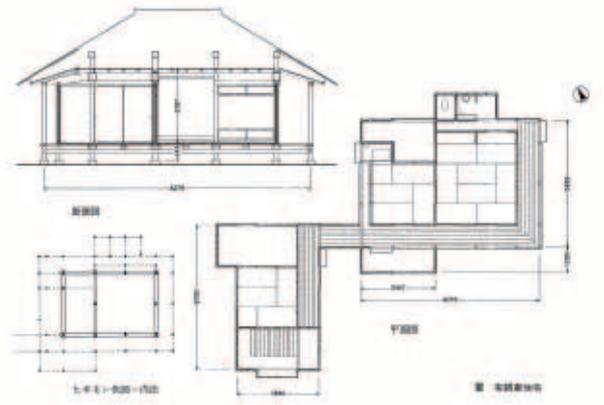


図9. 藺家住宅間取り図

奄美大島笠利町の民家調査報告 奄美市歴史民俗資料館蔵

マル、アカテツ、クロググ、ビヨウタコノキなどが見られ、庭園の横を流れる川沿いには亜熱帯の指標植物のヒカゲヘゴも自生している(図10)。表1に藺家庭園にみられる植栽を示した。

庭園に生息する生物も豊富であり、ルリカケスやオーストンオオアカゲラ、アマミシリケンイモリが確認できた。その他、藺博明氏によるとアマミヤマシギやアカショウビン、天然記念物に指定されているアカヒゲヤオットンガエルなども生息している^{注1)}。

5. 庭園の立地と信仰との関係

1) 庭園周辺の環境

藺家庭園は、ヤマグスク(山城)(図11)の麓に位置している。ヤマグスクは神神しい場所といわれ、ユタが神を分けてもらいに來ることがあったといわれている^{注1)}。ヤマグスクから流れる川沿いには、山頂まで続く道があり、「カミミチ(神道)」(図12)と呼ばれている。

この道は海からやってくる神が通る道であり、奄美には複数存在する。カミミチはヤマグスクまで続いていることから、ヤマグスクは集落の聖域であるカミヤマとして扱われていたと考えられる。一般的にカミミチは浜から始まり、山へ向かう。藺家庭園のカミミチは山へ向かう道しか確認できなかったが、谷川を海まで辿ってみると用安海岸へ続いていた。用安海岸には三日月岩と呼ばれる岩があり、岩と岩の間がカミミチとされていたことから、藺家庭園に通じるカミミチは用安海岸から始まる可能性が高い。

また、カミミチは「気」の通る道でもあるとされる。気の流れは海から道を通して山頂に届き、さらにその先の宇宙まで届き、再び太陽の恵みや水となって循環してくると信じられている。そのため、カミミチを物でふさぐことも禁じられている。奄美に語り継がれている俚諺に「水(むじい)や山おかげ、人(ちゅ)や世間おかげ、海山ぬ清らさや太陽(ていだ)おかげ²⁾」と言葉が残されていることから、奄美の先人たちの自然への信仰心や水の循環が人を豊かにするという考

えを窺うことができる。藺家庭園からヤマグスクへ向かう川沿いには水田跡も確認できた。庭園周囲の樹木の多くは株立ちになっており、薪炭の材料として伐採された痕跡があった。ヤマグスクは聖なる山とされながらも水田や薪炭の生産が行われ、奄美の俚諺で言われるように人々が自然の恩恵を受けて生活していた。

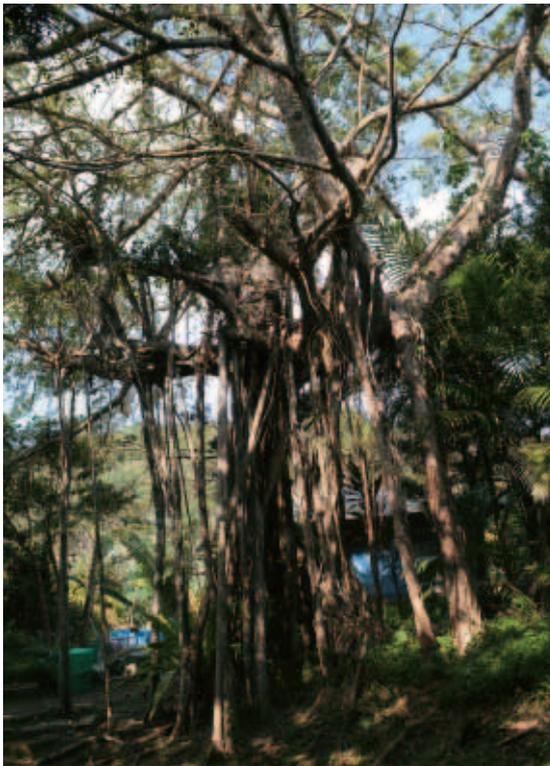
2) 藺家庭園の位置づけ

藺家庭園周辺の聖域を伝承と重ね合わせると、藺家庭園は神をもてなす広場である「ミヤー」としての機能を備えた場所であったことが明らかとなった。ミヤーは宮・庭を意味し、シマ(集落)ごとに、シマの中心として存在していた。海岸から山頂まで続くカミミチの線の上にミヤーが位置しており、祭りの日には人々が踊りで神を迎えてもてなしていたと伝わる。旧暦2月には神の住む「ネリヤ・カナヤ」から神を迎える「ウムケ(御迎)」の祭りが行われ、旧暦4月には神を送る「オーホリ(御送)」の祭りが行われる。ミヤーの付近には「トネヤ」と呼ばれるグジ(神役の男性)の住居があり、神の送迎の祭祀は主にトネヤで執り行われる。その他、「アシャゲ」と呼ばれる主に稲作儀礼を行なう小屋がトネヤの近くに建築されることが多い。一般的なカミミチの流れを図13に示した。

藺家庭園とミヤーとの間には、①カミミチの線の上に位置していること、②人々が踊りを行った広場が存在すること、という2つの共通点がみられる。さらに、藺家庭園には2棟の建築物があったといわれることから、トネヤとアシャゲが存在していた可能性がある。

トネヤが存在したと仮定すると、近隣の川沿いで確認できた水田跡は、グジに特別に与えられるグジ田、グジ畑という耕地であったとも推察される。しかしながら、ミヤーは神をもてなす広場であるのに対し、藺家の伝承では琉球王国の役人をもてなしたとされる点で異なる。

この点については両者ともにノロとよばれる琉球王府から公的に任命されて訪れた役人を、神事を執り行うミヤーに招かれたノロと同一視したのではないかと考えられる。また、ミヤーは集落の中心付近にあるのが一般的であるが、藺家庭園が人里離れた丘陵地に位置してい



ガジュマル



クロツグ



ビヨウタコノキ



ヒカゲヘゴ

図10. 菌家庭園の植栽

表1. 菌家庭園の植栽一覧

落葉樹	ヒカンザクラ	ヒメシヤラ	サルスベリ	オオシマウツギ	デイゴ
常緑樹	ガジュマル	アカテツ	ホルトノキ	シラカシ	イジュ
	モチノキ	サンダンカ	アマミヒイラギモチ		
針葉樹	イヌマキ	クロツグ	ナンヨウスギ	リュウキュウマツ	ソテツ
	ビヨウタコノキ				
その他	バナナ	ヒカゲヘゴ			

ることは、元来山の手にあった集落の勢力が海岸側へ移っていったこと³⁾が原因であると推察できる。

6. 蘭家庭園の風水

ノロ祭祀が根付いていた沖縄・奄美地方では、風水思想が重要視されていた。蘭家庭園をミャーとして捉えると、庭園の立地は風水を考慮していたとみられる。奄美大島のシマの多くは山を背に海に面した背山臨水となっている。蘭家庭園をミャーとしたシマも同様に背山臨水の形式となって、風水の基本を満たす。また、庭園は蘭家住宅の東側に位置しており、太陽神（女性神）が現れる方角を尊重した形となっている。

カミミチの伝承で確認された気の流れは、風水にお

いて重要なものであった。沖縄の風水では、気が地表に溢れ出してくる山があり、「祖山」とよばれる。祖山から溢れた気は山の連なりを伝い、この流れは龍に例えられて「龍脈」とよばれる。その後の気は川や道、平野を通り、海へ流れていく。気はエネルギーともみなされ、気を蓄えて濃密なものになると、その地に住む人々は平穏な暮らしができるとされた⁴⁾。それには、気を蓄える地形が必要であり、流れ込む気の流れを取り囲む山々や、海側に流れ出る気をせき止める衝立となる「安山」が存在する地を人々は求めた。このような地形の条件が整うと気が密封される地点ができ、そこは「穴」とよばれた⁴⁾。

蘭家庭園をみると、神聖な山とされたヤマグスクは祖山とみなすことができ、周囲もヤマグスクの尾根や七ん岳、フーグスク（大城）（図14）等の山で囲まれ



図11. ヤマグスク（山城）



図12. カミミチ（神道）

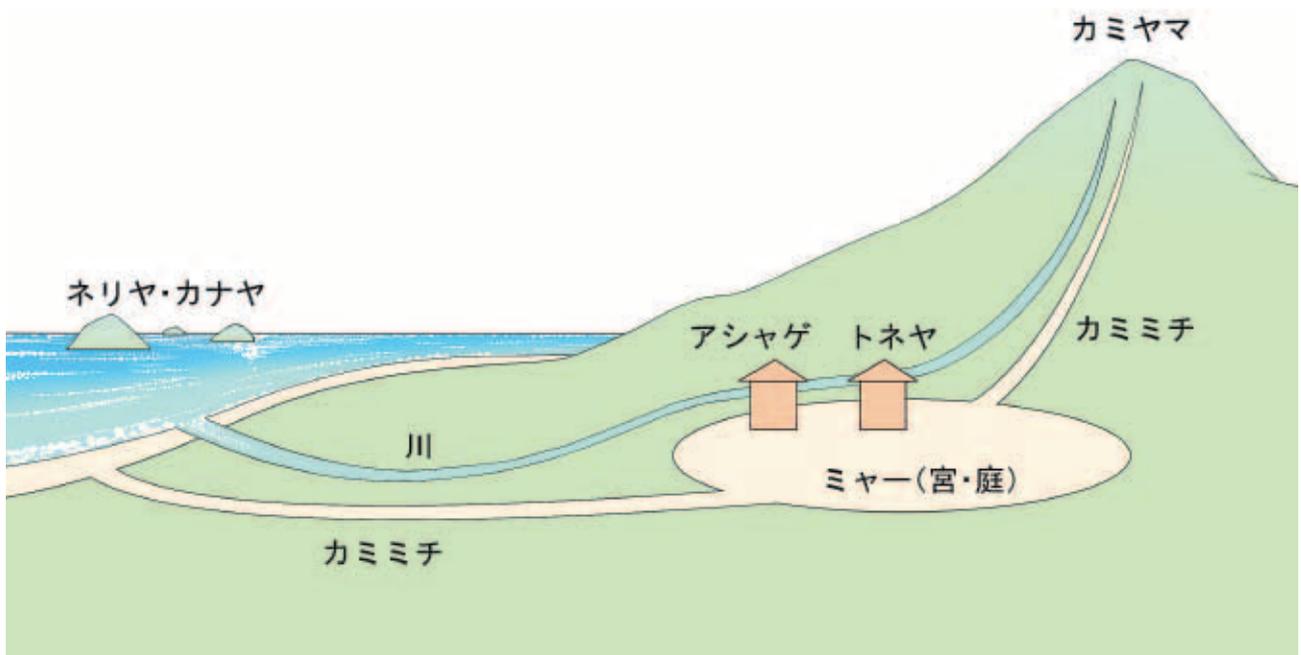


図13. 一般的なカミミチの模式図

ている。気が流れるカミミチや河川も湾曲しながら、山から海まで続いていることから、シマ中を気で満たすと考えられる。蘭家庭園と海の間にはニャトグスク（湊城）が存在し、安山の役割を果たしている。これらの山の位置関係から蘭家庭園はシマの中でも気が密封されやすい場所と考えられ、「穴」にあたる場所と考えられる。ヤマグスク、フーグスク、ニャトグスクの3つのグスクに囲まれて蘭家庭園の神聖さが高められている。

蘭家庭園の正門から広場へ向かうと広場の手前に池が位置している。風水思想では、家屋の前に池を設けると気の流れが止まるとされるが、沖縄で見られる「ヒンプン（屏風）」や「石敢當」と似たような性質をもち、



図14. フーグスク（大城）

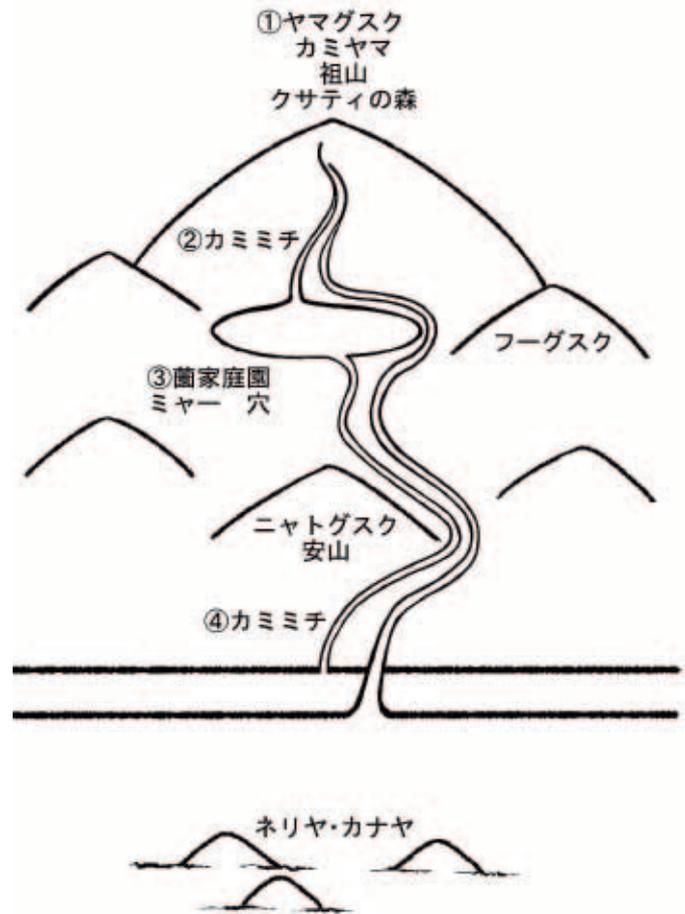
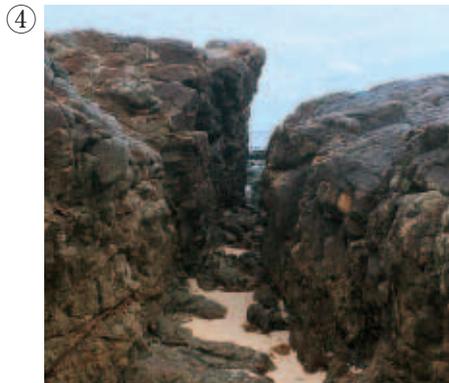


図15. 風水、ノ口祭祀、現地を照合した模式図

魔除けとなって良い気が蓄えられるとされる。蘭家庭園の場合は神聖な空間と景観を保つため、視界を遮る構造物を配置せず、池と道を横切る水路を造成したもののと思われる。

沖縄・奄美地方では村落が創設される際には、風水師が大きく関わっていた。気の流れも重要なものであったが、その他にも「クサティ（腰当）」という概念も重要視されていた。「クサティ」とは「信頼し、寄り添い身をまかす」という意味であり⁵⁾、クサティの多くは北風を防ぐことができる丘や山があてはまり、その丘や山は「クサティの森」と称された。そのため、村落の創設はクサティの南側の立地が良いとされていた。また、祖霊神をクサティとする思想も存在していた⁵⁾。

蘭家庭園の周囲にはグスクが3ヶ所確認でき、祖霊への信仰もあったと推測され、笠利町用安の集落がヤマグスクの南側に位置していることから、クサティの概念が蘭家庭園周辺にも導入されていたことが考えられる。図15に風水思想とノロ祭祀に関する名称、現地の様子をまとめた。

7. おわりに

蘭家庭園には踊りが行われた広場が存在し、しかも、海からヤマグスクまでのカミミチ沿いに位置していたことから、神を祀る清浄な空間ミヤーとしての存在である可能性を見出すことができた。現在残るミヤーの多くは空き地となっている場合が多いが、蘭家庭園は池を配し、豊かな自然の中で趣のある空間を維持している。

また、気が流れるといわれるカミミチの存在から、気の流れを重視する琉球の風水からも、蘭家庭園は気を蓄えることができる好条件の立地であったと考えられる。祖山や安山に当てはまる山があり、それらはグスクでもあった。風水でいう穴と考えられる蘭家庭園はグスクに囲まれ、神聖さを高めている。さらには、聖なる山から流れる川の水を園内に引き、踊りが行われた広場を囲って、聖なる水で清めている。

これらのことから、蘭家庭園は周辺地域の自然地形や歴史的遺構に配慮し、風水で気を高め、聖なる水で清めた舞台を配した祭祀空間であることが明らかとなった。また、蘭家庭園が長い年月維持され続けてき

たことは、こうした神聖な空間であり、ここに住む人々の生活が庭園や周囲の自然の中で育まれてきたことによるものであることが明らかとなった。

要約

鹿児島県奄美市笠利町に所在する蘭家庭園は、少なくとも藩政期に作庭されたと考えられる奄美大島唯一の貴重な庭園である。本研究では、実測調査、文献、伝承調査によって、役人をもてなしたとされる広場やカミミチと呼ばれる神聖な道の存在から、蘭家庭園が奄美大島における神を祀る清浄な広場であるミヤーとしての機能を十分に有していることが明らかとなった。奄美に残る蘭家庭園はヤマグスクからの聖なる水が広場を囲む、神聖な空間として保存されていたことが明らかとなった。

注

注1) 蘭博明氏への聞き取りによる。

参考文献

- 1) 宮澤智士(1996):奄美大島笠利町の民家調査報告:正進社, 45-105p
- 2) 沖縄大学地域研究所〈「復帰」40年、琉球列島の環境問題と持続可能性〉共同研究班(2012):琉球列島の環境問題:高文研, 304pp
- 3) 金久正(1978):奄美に生きる日本古代文化:至言社, 486pp
- 4) 財団法人沖縄県文化振興会(2005):沖縄県史・各論編第四巻「近世」:尚生堂, 286-293p
- 5) 沖縄大百科事典刊行事務局(1983):沖縄大百科事典:沖縄タイムス社

本研究は、JSPS 科学研究費助成事業(基盤研究C)課題番号15K07834の助成を受けて行った。